

部員減少に歯止めかからず 開校以来の伝統に幕

写真部

久下戸スポ

号外

発行 川越東高校写真部OB有志
価格 無料(フリー)
第三種郵便物不認可
文部科学省黙認

川越東高校の伝統がまたひとつ灯を消した。かねてより部員数の減少に歯止めが掛からず、存亡の危機にさらされていた写真部がついに今年度の新入部員「ゼロ」という事態を受けて休部となったのである。これまでも現役生・OBともにさまざまな対策を講じてきたところであるが、それも時局の流れの前には無力だったということだろうか。本紙ではこれを受け、写真部の歴史をふり



(写真) 部室の壁面には永年の歴史が刻まれている。

かえりつつ、まだ見ぬ新入部員に対するメッセージを掲載することにした。わざわざこのような辺境の地に足を運んで下さった翔鷹祭のお客様にこの現状を知って頂ければ幸いである。

休部

(写真) 事実上最後の部長となったS氏。

写真部・その歴史

川越市の辺境・萱沼^{かひぬま}の飛び地である久下戸^{くげと}の地に川越東高校が設立されたのは昭和59年(84年)のこと。伝統ある女子校・星野女子高校の姉妹校として「文武両道」をコンセプトに、充実した設備と講師陣が用意されたのは言うまでもない。

それに伴い様々な部活動が産声を上げたが、写真部はその中でも最古参の部類に入る。初代顧問の松尾先生は写真に対する造詣が深い方であり、まだまっさらだった校舎に写真部専用の部室を設立

したことは有名なエピソードである。専用のエアコンを設え、将来を見越して写真の現像処理には欠かせない大きな流し台や高級引き伸ばし機を装備したその部室は写真専門学校にも決してひけを取らない内容であり、その後の写真部の隆盛に大きく貢献したのである。

爾来、奥村先生、松林先生、伊藤先生、佐藤先生、と様々な先生方が顧問を歴任してきたが、写真部はそれぞれのフィールドで輝かしい成績を残してきた。この翔鷹祭での展示をはじめ、埼玉県南部地区展や埼玉県展、果ては全国高等学校文化祭への参加や雑誌のフォトコンテストでの入賞など、埼玉県内の写真部関係者には一目置かれる地位を築いたのである。春と夏には部員を引き連れて撮影旅行が催され、夏休みであつてもこの部室には常に誰かの姿があったのだ。まだ世の中が大らかだった時代、写真部には多くの猛者が往来し、川越東高校を牽引するカルチャーを生み出したのである。

文化部を襲った 「全入制度廃止」

しかし、「クラブ活動への参加自由化」制度が(2面へつづく)

川越東高校写真部

新川越東スペシャル

大写真部員

～生き方のバイブル～

◎文化祭◎

◎勝者物語
「嗚呼、勝ち組人生」

「ほとぼしってます！」

「永年の腰痛が治った！」

3年後、極めた男たちが立っている。手に成功を握って……。

「目が血走ってます！」

独創の文写両道教育を実践し、人間を磨き志望校合格へ突き進む。学業と写真部を両立させてこそ、理想の道。だから独自の文写両道教育で、写真部にも生物部にも力を注ぎ込む。貫実剛健。

(1面よりつづく) 施行された00年前後から事情は変わってくる。従来の、生徒は必ずどこかの部活やクラブ活動に所属しなければならなかったという制度が改められ、勉学に専念したい生徒はまっすぐ帰宅する、あるいは図書館や放課後の教室で自習に励むというスタイルが認知されるようになったのだ。これにより、メジャーな部活動以外では部員数の減少が進んだのである。部活動に所属することを望まない生徒にとっては朗報だったかもしれないこの事件は、はつきりと多くの文化系の部活動の衰退を招いたのだ。語弊はあるが、そうした部活動にとつてはとりあえず所属しているだけの生徒も必要だったのである。やる気のある生徒は、特に募集をけなくとも入ってくる。しかしそうした生徒はごく少数であり、多くの文化部はその他の生徒たちの居場所として提供されるという側面を持っている。これにより部としての体面を保つことができ、年間の部費の請求も有利に運ぶことが出来るのである。また、強い動機を持って入部しなかった生徒であっても取りあえず所属して、周りの活動を見ているうちにどんどん引き込まれていくという状況も筆者は多く経験している。そうし

た生徒がどんどん知識を吸収し、フォトコンテストで入賞したりするのを見るのもまた文化部の醍醐味と言えるのではなからうか。「クラブ活動への参加自由化」——この功罪について断ずることはあえて避けることにするが、この制度が写真部休部を招いたということに対しては論を待たないであろう。

かくして川越東高校写真部はこの春、20年の歴史にいったん幕を閉じることになったのである。松尾先生の意志を受け継ぐ部室は、主を失ったまま時を止めた。今では時折訪れるOBのための憩いの場になっている。しかし、この措置は「廃部」ではなく「休部」——すなわち、希望する者があればいつでも復活可能という意味を留保しているのだ。これをお読みの中学生の皆様、そして現役生の皆様、そして父兄の皆様にあつてはぜひこの場所にこういう部があつたという事を思い出していただきたいのである。これは単なるOBの昔話に過ぎないのかも知れないが、われわれは写真部の滋味を知ってしまった者ばかりだ。最高の設備に囲まれ、文化部随一の独立性を誇った写真部。数ある文化部の中でも特に県内に広い影響力を持ち、進学率(先)も他の部活動と

比較して高い実績を誇った写真部の伝統が閉ざされることは、ひいてはOBたちのアイデンティティを失わせることにほかならないと思うのである。われわれは単なるノスタルジーによってではなく、ここに写真部の再興を誓って動き出さねばならない。

写真部が求められる理由

そこで今、求められているのが新たな写真部を再興してくれる現役生ならびに中学生の力である。われわれOBたちが誇りをもって運営してきたこの写真部なのであるが、恥ずかしながらその写真部という言葉にはその実際とはかけ離れたイメージが常につきまとってきた。80年代の正統派アイドルの時代には「カメラ小僧」、そして90年代初頭のヘアヌード台頭期



(写真) 生徒たちのイメージの源泉・一眼レフカメラ。

には「ヌード写真」、そして90年代後半の若い世代によるアート写真の流行期には「モノクロ写真マニアの変な奴ら:」(そして、その間にはカメラマニアたる宮崎勤の幼女殺害事件や田代まさしの盗撮事件などがあつたことも付記しなければならぬ) そんな時代を経て、04年の現在にはもはや写真は銀塩写真(ゼラチンに銀粒子を塗布した、いわゆる従来のフィルムを使用する写真)である必然性を失いつつあり、デジタル化されたデータを基にしたイメージングが当然のこととして語られる時代になってきた。撮影の自由度、そして撮影された写真に対する介入の可能性はかつてなく高まっております、写真という言葉は新たな定義を必要とされるようになっていく。しかしながら、今こそまさに新たな写真の時代が幕を開けたのだとも言えるだろう。時代は全く変わってしまったのである。

ただ、いつの時代にも写真部員が目指し、そして新たな部員を惹きつけてやまなかったのは「創造の喜び」「新しいメカに対する興味」この2点である。過ぎてしまえばあつたという間の3年間。多くの生徒たちがこの時間を退屈な、大学受験までのモラトリアムとして過ごす中、カメラを持った写真

写真部ブレスGで人生が変わった!!

ニューヨークでも話題騒然!!

今、流行に敏感なヤングの間で超人気のアイテム、それが「写真部ブレスG」。各国のセレブが愛用するからその開運パワーは誰もが認めることだ。

その効果の秘密は、川越市久下戸の川越東高校写真部で探掘される。3日以内に運を古くくつけた人として珍重され、写真部員はこれにより写真部員としての風習が身につく。

・写真部員急募

川越東高校写真部では、次代の写真部を担う若い力を随時募集しています。

- ・3時バスで帰らない方
- ・片づけのきちんと出来る方
- ・冗談のわかる方
- ・アレな話も可能な方
- ・これはという趣味をお持ちの方

部員はそれをビッドに切り撮ってきたのである。その写真が世に出ようが出まいが、コンテストでどんな成績をおさめたのかはこの際問うまい。しかし、その時間をただ漫然と過ごすのではなく、一瞬一瞬を切り撮りながら生きてきた写真部員の生き方は毅然としていたのだ。思春期後期の不安な心情をフラインダーに反映させ、一枚一枚リリースする写真たち。撮った瞬間には価値を感じられなくとも、後になってじっくりと見ればそれらは確実に、その時にしか撮ることの出来なかつた写真だと言ふことが身に沁みて分かるものなのである。創部当時に比べて写真はずいぶん気軽な存在になり、携帯電話ですらそれなりの写真が写るようになってしまった昨今であるが、写真という行為はやはり創造する行為なのである。目の前の現実に関わりなく近い複製を行うこと。その複製に意味を求めること。そしてその為により高い撮影技術を求め、最先端の技術に触れてゆくこと。それらは漫然と写真に携わっているだけでは決して到達できない高みであり、また同時に部活動という枠組みがなければ不安なものになってしまうのだ。

再興写真部が 目指すべき道

写真は気軽なものになった、と書いた。コンベンショナルな写真に携わってきたわれわれからすれば複雑な心境もするのであるが、これからの皆さんにはジャンル・機材を問わずにどんどん撮り散らかしていつて欲しいと思うのである。銀塩写真に関しては恐らく県内の高校（私立・公立問わず）中、最高の設備を誇る川越東高校ではあるが、これからの時代はデジタル写真を趣味、と呼ぶのもまた結構なことだと筆者は思うのである。まだまだデジタル化は全くと云っていいほどなされていない川越東高校写真部であるが、もし新入部員が入り、そういう要請があるのであれば学校側としてもその為の投資は惜しまないと思うのである。（むしろこれは私自身の個人的な要請である）デジタル写真を知った上で銀塩写真に行く、逆もまた真だろう。写真に対して先人たちが培ってきた叡智を知りつつ、最新の、これから無限に広がってゆくであろうイメージングの夢を見ることは現代を生きる若者の特権であると思う。とにかく「写

真」と名の付くものであればどんなものにもチャレンジしていつてほしいと思うのだ。

また、「先輩」が誰もいないというのも再興部員の特権とは言えないだろうか。運動部とは違い、先輩―後輩のタイトな人間関係はかつて見られなかつた写真部ではあるが、それでも年長者の目というのは気になるものだろう。しかし、今入部すれば部はすべて自分のものになるのである。自ら部長に就任し、あの部室を独り占めできる光栄に浴したものはいまだかつていなかった。少しでも写真という言葉を意識したことがある生徒にとつて、この特典は何物にも代え難いものだと思ふ。どうあがいても、辺境の、女子もない男ばかりの学校なのである。男は元来メカ好き、カメラ好きなものだと筆者は言い切つてもいい。その嗜好を隠す必要はもはやどこにもないのではなからうか？

事実、写真部には写真のみならず、既存の部活動が吸収できないジャンルの趣味人が多数集まつてきた。自動車、バイク、鉄道などなど：彼らは写真という媒体を通じてそれらと関わりながら、数多くの仲間たちと共に知識を深めていったのだ。卒業生のその後の進

路を見ても、事実として彼らはそうした若い頃の夢を実現しているのである。For the future―誰の言葉かは関係者にはお分かりだろうが、ここにはまさに future が存在する。そうしたサロンとしての役割も今後の写真部には期待されるといえよう。

話が散らかつてきてしまったのだが、結局、写真部を再興出来るのは現在 15〜18 歳の皆さんでしかあり得ないのだ。われわれが理想を述べればきりが無い。少しでも写真という言葉に興味を持ち、この 3 年間を充実させたいと思う皆さんにとつて、この部はまたとない器と素材を提供するだろう。そこでどんな料理を食するかは皆さんの心ひとつだ。しかし、それが決して徒労に終わるものではないことはわれわれ歴代の OB たちが保証する。われこそと思う人は是非、この部の門戸を叩いてほしい。



(写真) 県内随一の設備の一部。部室内にはこの他にもさまざまな設備が用意されている。

☆ 星野フラメンコ ☆

ふと考えてみた。小生が部活入部を控えた子をもつ親だとして、どの部活を受けさせるだろう。もし部活入部をする本人だとして、どの部活に入部希望するだろう。親としては「爽やかで真面目な部活を送って希望する大学へ現役合格させてくれる部活」、受験生本人だとして「明るく楽しい部活生活が送れる部活」を選ぶだろう★写真部を長く取材をしてきて思うのは、写真部とはこの両方を兼ね備えた学校ではないかということである★髪型、ミニスカート、化粧、誰一人としてそんなことをしている生徒はいない。礼儀正しくあいさつをする。登下校時の楽しそうな表情。体育祭や文化祭の時はグループで趣向を凝らした出し物を作り、思い切り自分を表現し思い切り自分を発散させる。新しく大スケールの記念講堂はないけど、これも生徒の活動と心を豊かにしている★過去から続く現役合格率の高さ。みんなが目的を見つけて勉強し目的に見合った大学を選び現役合格する。小生が高校生の時、そのような勉強をしていたか。していないし目的すら見つからなかつた。教育とは「教える、育てる」と書く。写真部の教育は文字通りであり一点の曇りもない★安心な教育・指導と楽しい部活。親の気持ちと子供の気持ちとが合致する。夏を過ぎれば部活入部は本番に入る。教育と指導、生徒たちの姿、施設の大きさ、新しさ。まずは納得いく部活をじっくりと選んでほしい★もし小生が写真部で高校時代からやり直せるとしたら、今とはまったく違った別の人生を歩んでいたらうと、冗談めかして思ってみたりしている。